

彙報

第四一回野尻湖クリルタイ

澁谷 浩一

二〇〇四年七月十七日(土)から七月二十日(火)まで野尻湖クリルタイ(日本アルタイ学会)が開催された。四一回を迎えた今年もほぼ例年通り延べ四七名の参加者を数えた。参加者のコンフェッションの概要は次の通り。なお、業績はクリルタイ前一年間に公刊されたものを中心とし、タイトルの副題は原則として省略する。以下本文中今年・本年とは二〇〇四年を、昨年とは二〇〇三年を指す。

池尻陽子(筑波大M)はダライラマ五世の北京訪問に関する卒論を提出、『満族史研究』三に投稿。石附玲(大阪大M)は唐初期ウイグルの突厥や唐との関係について考察した卒論を提出。ネストリウス派キリスト教について関心を持つ。市丸智子(九州大D)は、「元代貨幣の貫文・錠両単位の別について」(『社会経済史学』六八一三)、「九州大学附属図書館六本松分館蔵『大元軍営宝鈔』」(『日本モングル学会紀要』三四)を発表。今堀恵美(都立大D)は

二年以上にわたりウズベキスタンでフィールドワークを行い、歴史科学(歴史学研究二〇〇三年)共和国学会で「伝統」の2つの側面に関する「考察」を、民族学者カリム・シヨーンニョーフ生誕八〇周年記念国際学術会議で「共同体を想像する二つの方法についての「考察」をそれぞれウズベク語で口頭発表。後者は学会記念誌「ウズベキスタン民族学——新見解と理論的方法論へのアプローチ」に採録される。上田裕之(筑波大D)は「清、順治期―乾隆期前半の京師宝泉・宝源両局における制錢の鑄造費用について」(『史叢』一〇)を発表、歴史人類学会で「明朝における銀財政の成立と貨幣政策」を口頭発表。牛根靖裕(立命館大D)は主にモンゴル時代の陝西・甘肅・四川のオングト集団及び諸軍団について研究、四川行省の成立と至元年間後期の元朝西南の状況について論文を準備中。梅村坦(中央大)は、在外研究でロンドンに滞在、ウイグル文書の調査を行う。また、『イスラーム世界』(岩波書店)を共編で刊行、『世界史小辞典(改訂新版)』(山川出版社)及び *History of the Civilization of Central Asia* (UNESCO)の編集に携わる。ウラーン(烏蘭)中国社会科学院民族学人類学研究所)は学振外国人特別研究員として早稲田大学に滞在、元朝秘史に関する日本の研究について調査中。大出尚子(筑波大M)は満洲国国立中央博物

館を扱った卒論を提出。岡洋樹(東北大)は「東北アジア地域史と清朝の帝國統治」(『歴史評論』六四二)を発表、昨年三月東北アジア研究センターで開催したシンポジウムの報告論文集『東北アジアにおける民族と政治』(東北大学東北アジア研究センター)を共編で刊行。ウラーンパールのシンポジウム「モンゴル史の諸問題——歴史学と民族学からのアプローチ」で「満洲時代のモンゴル社会におけるオトグ、バグについて」を、北京の中央民族大学蒙古学文獻国際研討会で「ザサグト・ハン部史」と清代モンゴルの歴史記述」を口頭発表。小沼孝博(筑波大D)は北京の清史・満族史国際学術研討会における口頭発表「論清代唯一的哈薩克牛泉之編設及其意義」を「清史論集——慶祝王鍾翰教授九十華誕」(紫禁城出版社)に寄稿、「清朝によるオーロト各オトク支配の展開」(『東洋学報』八五―四)、「清代乾隆朝におけるジャハチンの動向」(『史境』四八)、「西域地理図説」所収の中央アジア諸部に関連する満文記事について(片岡一忠科研報告書『明清両朝の「藩」政策の比較研究』)を発表。片桐宏道(京都大M)はチベットと清朝の関係について、特にポラネーに焦点を当てた修論を準備中。菊池俊彦(北海道大)は「環オホーツク海古代文化の研究」(北海道大学図書刊行会)を刊行。「考古学からみた環オホーツク海交易」(日本気象学会「天気」五

〇一七)を発表、野村崇・宇田川洋編『新北海道の古代②』(北海道新聞社)に「大陸との交流」を書く。昨年六月と八月にはサハリンへ赴き、北大文学部で「発見」された人骨のウイルトタ民族への返還に奔走、八年かかった三体の頭蓋骨の返還を完了させ、報告書を刊行。今年も関連文献資料の調査でサハリンへ赴く予定。また、科研費の奴児干永寧寺碑文の研究でウラジオストクとハバロフスクへも行く予定。金泰虎(甲南大学)は日本中世史を専攻するが、十六世紀東アジアの国際関係、文祿・慶長の役に関する研究を進める。楠木賢道(筑波大)は「錫伯編入八旗再考」(『清史論集』)、その日本語版「シボの八旗編入再考」(片岡科研報告書)を発表。小林亮介(筑波大M)は清末東チベット在地勢力と四川省の関係について卒論を提出、社会文化史学会で口頭発表を行う。サイン(色音、中国社会科学院民族学人類学研究所)は国際日本文化研究センターに客員外国人研究員として滞在、日本におけるシャーマニズム研究の調査・文献収集を行う。櫻井智美(明治大)は「元代科挙受験持込許可書をめぐって」(岩井茂樹編『中国近世社会の秩序形成』人文科学研究所)、「近年来日本の元史研究」(『中国史研究動態』二〇〇四―三)を発表。佐藤貴保(大阪大非常勤)は博士論文『西夏貿易史の研究』を提出、サンクトペテルブルク・ロシア科学アカデミー東

方学研究所所蔵の西夏時代ハラホト文書を昨年度に引き続き調査し、「西夏法典貿易関連条文訳注」(「シルクロードと世界史」大阪大学大学院文学研究科)を発表。総合地球環境学研究所でも口頭発表を行う。真田安(立教大非常勤)は「中央ユーラシアを知る事典」(平凡社)で数項目を担当、高校世界史Aの教科書改訂で「ユーラシアの交流圏」などを執筆。澁谷浩一(茨城大)は北大スラブ研究センター「ロシアの中のアジア・アジアの中のロシア」第三回研究会で一八世紀露清関係史に関する口頭発表を行う。清水由里子(中央大D)は二〇〇二年五月からウルムチの新疆社会科学院に留学、カシユガルを中心として新疆近現代史に関する資料収集、現地調査を行う。新免康(中央大)は「カザフスタンのウイグル人社会における学校教育と民族文化」(『歴史と地理』五六六)を発表、東洋文庫欧文紀要六一二「The History of the Mausoleum of the Ashab al-kahf in Turfan」を書く。科研費「中央アジアにおけるウイグル人地域社会の変容と民族アイデンティティに関する調査研究」の研究代表者として、フェルガナのウイグル人村訪問やタシケント所蔵写本の共同研究に従事、本年末には新疆史研究の国際ワークショップを開催予定。今年春には台北の中央研究院近代史研究所等を訪問。なお今年三月の第六回「まつどきワークショップ」において日本

中央アジア学会が正式に発足し、会長に就任。また、事務局世話人として中国ムスリム研究会も主催。杉山清彦(大阪大)は「漢軍旗人李成梁一族」(『中国近世社会の秩序形成』)を発表、「満族史研究」三に「神田信夫先生の満洲II 清朝史研究」及び「韃靼漂流記」の故郷を訪ねて」を寄稿、第四〇回クリルタイの彙報を「東洋学報」八六一一に書く。また、昨年一二月には台北の中央研究院歴史語言研究所を訪れ満文檔案史料の整理に従事。鈴木宏節(大阪大D)は阪大COE海外研究費によりモンゴル国を訪問、トニユクク遺跡等の遺跡調査に従事。また、古代テュルク関連の資料調査でヘルシンキを訪問する。鈴木真(学振・一橋大)は清朝の支配構造を扱った博士論文を提出。武田和哉(奈良市教育委員会)は、ロシア沿海州・クラスキノ土城郊外の勃海墓、奈良市西大寺旧境内食堂院跡の発掘調査に従事。特定領域研究「北東アジア中世遺跡の考古学的研究」第一回総合会議で「契丹国(遼朝)の考古資料について」を、中央アジア学フォーラムで「契丹国(遼朝)の蕭姓について」を口頭発表、他にも西大寺研究会及び熱帯農業学会にて口頭発表を行う。今年も内蒙古及びアムール州で遺跡調査の予定。田中裕子(早稲田大M)は天山以北の岩画に関する卒論を提出、中央ユーラシア・草原地帯の考古学を専攻する。田淵人司(信濃むつみ高等学校東京エク

ステンションセンター)は三年間の北京・中央民族大学での留学を終えて帰国。現代モンゴル文学を専攻。中村篤志(山形大)は「清代モンゴルの比丁冊に見るタイジの血統分枝集団」(『集刊東洋学』九〇)を発表、博士論文「清代モンゴル社会構造研究」を提出。また、内陸アジア史学会で「清代モンゴル社会におけるタイジの属民所有」を、東北中国学会で「清代モンゴルにおけるタイジの血統と旗支配」を口頭発表。萩原守(神戸大)は「清朝治下諸地域の法制史に関する研究状況」(『北東アジア研究』七)を発表、「滿族史研究」三に「K. Sagaster 氏紹介モンゴル文裁判文書 A77 の再検討」を寄稿。白玉冬(大阪大M)は唐宋・五代期の韃靼に関する研究を進める。林俊雄(創価大)は B・マルシャークの古稀記念論集(電子版)に「Sogdian Influences Seen on Turkic Stone Statues」を寄稿し、「草原遊牧文明の環境考古学」(安田喜憲編『環境考古ハンドブック』朝倉書店)を発表。西安の漢唐陵墓制度研究国際学術研究会において「Comparative Study on the Mausoleums of the Tuqne and the Chinese Rulers」を京都S Archaeological Research in Asia: Europe-Japan Colloquium 2003 に参加し、「Archaeological surveys in the Central Eurasian Steppe」を口頭発表。昨夏はモンゴル国で遺跡調査を行い、今年春にはシベリア各地の博

物館を訪問。広川佐保(学振・一橋大)は満洲国の土地政策に関する博士論文を提出、「蒙古産業公司をめぐる人々」(『近現代東北アジア地域史研究会 NEWS LETTER』一五)を発表。近現代東北アジア地域史研究会大会で「満洲国」における「錦熱蒙地」の処理について」を、日本大文学人文科学研究所共同研究B合同研究集会で「薄守次の見た一九二〇年代のモンゴル社会」を口頭発表。船田善之(学振・東京大)は「色目人与元代制度・社会」(『蒙古学信息』二〇〇三一一)、「蒙元時代公文制度初探」(齊木徳道爾吉主編『蒙古史研究』七、内蒙古大学出版社)を発表、「元史研究通訊」一七に「二〇〇二年漢・日文及近期英文元史研究文献目録」を分担執筆。「日本モンゴル学会紀要」三四に「二〇〇三年中国蒙古族歴史与文化国際学術研討会参加報告」を書く。また、中国蒙古族歴史与文化国際学術研討会で「蒙元時代公文制度初探」を、遼金西夏史研究会で「長清靈巖寺執照碑の研究」を、中国社会科学学会大会で「元代の命令文書の開説について」を口頭発表。細谷良夫(東北学院大)は「呉三桂反乱和楊起隆・朱三太子之關係」(『清史論集』)、「満洲族政權としての清朝」(『東北アジアにおける民族と政治』)、「蝦夷錦研究をめぐる提言」(『蝦夷錦と北方交易』青森県立郷土館)を発表。また、国立民族学博物館共同研究会「環日本海文化に関する人類学

的研究」で「日本に伝えられた「マンジュ・グルン清朝」をめぐる情報」を口頭発表。今夏はアムール流域調査でアルバジンへ赴き、一〇月には八旗制度をテーマにシンポジウムを開催する予定。牧野弥（東京外大学部）は東西交渉史・元朝時代の社会に興味を持ち、大学院進学を目指す。松井太（弘前大）は、「金代のキタイ系武将とその軍団」〔東北アジアの民族と政治〕、「モンゴル時代の度量衡」〔東方学』一〇七）、「シヴシドゥ・ヤクシドゥ関係文書とトヨク石窟の仏教教団」（森安孝夫編『中央アジア出土文物論叢』朋友書店）、「モンゴル時代のウイグル農民と仏教教団」〔東洋史研究』六三一一）を発表。D. Durkin-Meisterernst et al. (eds.), *Turfan Revisited* (Berlin) の「Unification of Weights and Measures by the Mongol Empire as Seen in the Uigur and Mongol Documents」を寄稿。また、大谷探検隊百周年記念国際シンポジウム「仏の来た道——シルクロードと現代科学」で「Uigur Peasants and Buddhist Monasteries during the Mongol Period」を口頭発表。イスタンブル及びロンドンにおいてウイグル語・モンゴル語文書の調査を行う。松村公栄（大阪外大M）は、清朝末期に西トルキスタンへ移住した東干族について研究中。丸山健太（東北学院大M）は嘉慶・道光年間の旗人の生計問題について研究。宮尾美

保（新潟大学部）はモンゴル時代の漢人社会に関心を持つ。村上信明（筑波大D）は二年間の中国人民大学への留学から帰国。「乾隆朝中葉以降の藩部統治における蒙古人官僚の任用」〔史鏡』四七）、「乾隆四十年代後半以降の藩部統治を担当した蒙古旗人官僚」〔史峯』一〇）を発表。毛利英介（京大D）は「一〇七四から七六年におけるキタイ（遼）・宋間の地界交渉発生の原因について」〔東洋史研究』六二一四）を発表。森川哲雄（九州大）は「乾隆期におけるキヤフタ貿易停止と大黃問題」〔九州大学二一世紀COE『東アジアと日本』交流と変容』創刊号）を発表、同COE英文紀要に「蒙古源流」と「シラ・トゥージ」の関係についての論文を書く。また、井上治著「ホトクタイ・セチェン・ホントイジの研究」の書評を「内陸アジア史研究』一九に書く。森部豊（文京大非常勤）は「唐末五代の代北におけるソグド系突厥と沙陀」〔東洋史研究』六二一四）を発表、「NHKスペシャル文明の道③海と陸のシルクロード」（日本放送出版協会）に「安史の乱とソグド人」〔ソグドの大地』）を書く。また、「回顧と展望（中国隋・唐）」を『史学雑誌』一一三―一五に書き、榮新江論文「唐写本中の「唐律」「唐礼」及びその他」を『東洋学報』八五―一二に和訳。また、唐代史研究会シンポジウムで「八―一〇世紀の華北における民族移動」を、北京でのソグド人に関する

る国際学会で「自唐後期至五代期間の粟特系武人」を口頭発表。山田美保（都立雪谷高校）は勤務校の統合により新しい高校に移る。山本明志（大阪大D）は修士論文「モンゴル時代における藏漢交通とチベットの支配体制」を提出、「烏臺筆補」訳註稿（二）（「内陸アジア言語の研究」一九）を共著で発表。

続いてプログラムの概要を紹介する。

一七日夜は武田和哉「ロシア沿海州・クラスキノ土城郊外所在の渤海時代積石墓の発掘調査概報」。科研費「サハリンからみた北東日本海地域における古代・中世交流史の考古学的研究（研究代表者前川要）」の一環として、ロシア科学アカデミー極東支部考古民族研究所の全面的協力を得て二〇〇三年八月七日―二二日に行われた発掘調査の概要をスライドを交えて報告。この調査では、初めて渤海時代の積石墓の存在が特定され、帯金具数点、渤海時代の土器片を確認することが出来たという。

一八日午前最初は山本明志「モンゴル時代の藏漢交通」。従来、チベット僧の横暴な行動の例として取り上げられてきた『永楽大典』所収「経世大典」「站赤」の記事を詳細に再検討、モンゴル時代におけるチベット―漢地間の具体的な物流・チベット人往来の様相を解明し、交通面からチベット―モンゴル関係を論じた。その上で、チベットが仏

事を媒介に漢地世界から富を得る構造がモンゴル時代に確立されることを論証、その構造は一二世紀までのインド―チベット関係を継承するもので、布施として富を得る立場がインドからチベットに移行するという展望を述べた。

続くウラーン「元朝秘史」中の馬阿里黒・伯牙兀歹について」は、「秘史」に二箇所出現する「馬阿里黒・伯牙兀歹 (Ma'aliq Baya'udai)」なる言葉を取り上げ、従来マアリクを人名とするか氏族或いは部族名とするか見解が分かれていたこの言葉について、「秘史」本文や他文献の類似用例との比較検討により、「バヤウト部族のマアリク氏族の男」と解釈するのが妥当と結論づけた。

午後の冒頭は座談会「神田信夫先生を偲んで」。楠木の司会の下、細谷・森川・杉山がバネリストとなり、昨年末急逝されたクリルタイ創設メンバーの一人である神田先生の学問とお人柄を偲んだ。細谷は「学生として授業を一度も受けたことがない」にも拘らずそれ以上の師弟関係にあった神田先生との間柄を披露。森川は「クリルタイ」という名称がそもそも神田先生の発案であることを改めて紹介。杉山は「満族史研究」三に寄稿した文章（前掲）の内容を紹介しつつ、神田先生の学問を研究史の中に的確に位置付けた。フロアからも思い出が披露され、奇しくも昨年の第四〇回に続いてクリルタイの歴史を振り返る企画となった。

続く武田和哉「近年出土の墓誌史料よりみた契丹国（遼朝）の政治と社会について」は、近年発見された墓誌史料を中心に取り上げ、従来の契丹人の部族制・社会構造に関する通説に再考を迫る事例を具体的に紹介、今後の契丹国研究における墓誌史料の重要性を指摘した。

午後最後の船田善之「元代の命令文書の開読使臣について」は、元代文書行政の運用の一端を解明するため開読使臣を取り上げ、それが本来の職務として日常的に命令文書を担った官吏と特定の命令文書の伝達を臨時に担当した高官の二層からなっていたことを論証。使臣の具体的な経路を解明した上で、派遣に際しては站赤の負担の効率性が常に優先事項であり、様々な事由で規定外の地点へ開読に赴く使臣が多かったことも確認。さらには、ハラホト出土文書によって、地方行政官府側の手続きを再構成し、開読使臣がモンゴル政権の広大な版図に対する統治に重要な役割を担っていたと結論づけた。

夜の部サイン「ホルチンモンゴルのシャーマン儀礼」は、定住化した半農半牧のホルチン左翼中旗のシャーマン儀礼を、ビデオ映像を中心に紹介した。翌日の発表の前哨報告。一九日午前最初の中村篤志「清代モンゴル社会における族中タイジの旗支配——乾隆年間所属タイジ認定訴訟の事例から——」は、清朝治下モンゴル旗社会において支配層

を形成する「族中タイジ」が、「ソム」や「所属タイジ (garijatai jin)」達を統属下に置いていた事例を分析。制度上は明示されないこのような統属関係を、清朝服属時点

の有力家系に属する一部の族中タイジ達が占有していた事実や、統属関係の形成・変容過程を解明し、そこから、旗社会の権力関係が一部の有力統タイジを軸に構成されるという基本構造の存在と、かかる基本構造が清朝服属以前から存在し、清代において統治制度と併存し続けた可能性を指摘した。

続くサイン「モンゴルシャーマンの入巫過程について」は、モンゴルシャーマニズムの歴史及びシャーマニズムに関する近年に至る研究動向について概観した上で、シャーマンの入巫過程の具体的様相について詳細に解説を加えた。

午後最初の上田裕之「清、雍正、乾隆初年における戸工両部の制錢支出と禁旅八旗の兵餉」は、京師で銅錢の対銀比価が上昇した雍正、乾隆初年の清朝の制錢供給政策を検討。京師宝泉局・宝源局の制錢鑄造は採算割れにも拘らずその規模が拡大され、両局から戸工両部に納入された制錢が可能な限り禁旅八旗兵餉の一部にあてられていた事実注目。その目的が、兵餉となるべく多くの制錢を兵丁に支給することにより、兵餉銀の銅錢への兌換時に金融業者の錢価吊り上げによって八旗兵丁が被る被害を防止し、両者

の利害対立を緩和することにあつたことを論証、ここに「征服王朝」としての清朝政権の特質が認められるとした。

今堀恵美「ブハラ州農村地区刺繍(スザニ)制作の歴史の変遷と社会変化——聞き取り調査の報告を中心に——」は、ウズベキスタンのブハラ州における現地調査を元に、ウズベク女性の「伝統」工芸である刺繍製作について報告。特に現在行われている刺繍の素材、デザイン、サイズは、大別してブハラ・アミール国期、ソ連時代初期、後期、独立後によって大きく異なつてきたことをデジタル資料を用いつつ明示した。

午後最後は清水由里子「民族名称「ウイグル」を巡る一考察——二〇世紀前半の「ウイグル」知識人の言説を中心に——」。一九三四年にカシユガルで出版された現地語の新聞「新生活 *Yenqi Hayat*」を主要史料として、民族名称「ウイグル」をめぐる知識人の自己認識について考察。彼らは一九三四年新疆省政府の民族政策によって「ウイグル」の名称を使用しはじめたが、積極的に民族史の創出を図ろうとするその動きの背景には、知識人の自民族の状況への危機感と民族文化振興への焦燥感があり、そこに一九八〇年代～九〇年代半ばのウイグル「民族文化」強調の流れとの共通性が認められることを指摘した。

一九日夜は林俊雄「南シベリアの研究機関と遺跡を回つて」。今年春に赴いたウラジオストク、ノヴォシビルスク等八つの都市の研究所・博物館等を豊富なスライドとビデオ映像によつて紹介。容易には実見しにくい南シベリア各地の博物館の貴重な展示物を目にする事ができた。

最終日の懇親会も無事終わり、翌朝朝食後に散会した。今年もここ数年と同様かなりタイトなプログラムとなった(唯一のレクリエーション湖上遊覧も白鳥号の「引退」が発覚して中止)が、発表内容は充実したものが多く、各分野における研究の着実な進展を感じさせた。そもそもクルルタイは、アルタイ学及び中央ユーラシア地域の「民族・文化・歴史」に関心を寄せるものが、専攻分野の枠を超えて大いに討議し交歓しよう(山田信夫「第一回若手アルタイ学者の集まり」『東洋学報』四七—三)という主旨で始まった。その意味で今年は特に言語学分野からの参加者が少なかったのがやや残念であった。宿の「厚意」で七月第三—四週の連休を含む日程がほぼ固まりつつあるので、今後より幅広い地域・分野の研究者の参加を望みたい。二〇〇五年は七月一六日(土)から一九日(火)に開催の予定である。